

震災学習スタディツアー2024 活動報告書

支縁 ~ いつまでも忘れず、語り継ぐ



 敬愛大学

教育の敬愛
- 創立 100 周年 -

地域連携センター

(表紙)

宮城県名取市の「閑上の記憶」で、学生たちが鳩風船に記した天国で見守ってくださる方々へのメッセージ。30名が温かいメッセージを鳩風船に托しました。

全国から寄せられたメッセージ入りの鳩風船約460個は、3月11日に閑上の記憶が主催する「追悼のつどい」で、参加された多くの方々の手で大空に飛ばたいっていったそうです。

表紙の上下2色の帯は、本学のスクールカラーである「敬愛レッド」「敬愛ブルー」です。

震災学習スタディツアー2024 訪問地写真集



関上プラザ(関上中学校慰霊碑)にて



関上日和山で長沼俊幸さんと



名取市震災メモリアル公園で



「関上の記憶」で丹野祐子さんと



「関上の記憶」で鳩風船にメッセージを托す



女川の堀切山を臨む場所でお話しを伺う



NHKのカメラを前にお話しを伺う学生たち



奥様への思いを語る高松康雄さん

震災学習スタディツアー2024 訪問地写真集



愛梨さんの遺品の前で佐藤美香さんと



愛梨さんを発見された場所で



震災遺構・浪江町立請戸小学校



地震と津波で陥没した請戸小体育館の床



双葉町の震災伝承館に展示された消防車



福島第一原子力発電所の模型



コミュニティ福島で放射線の飛散状況を学ぶ

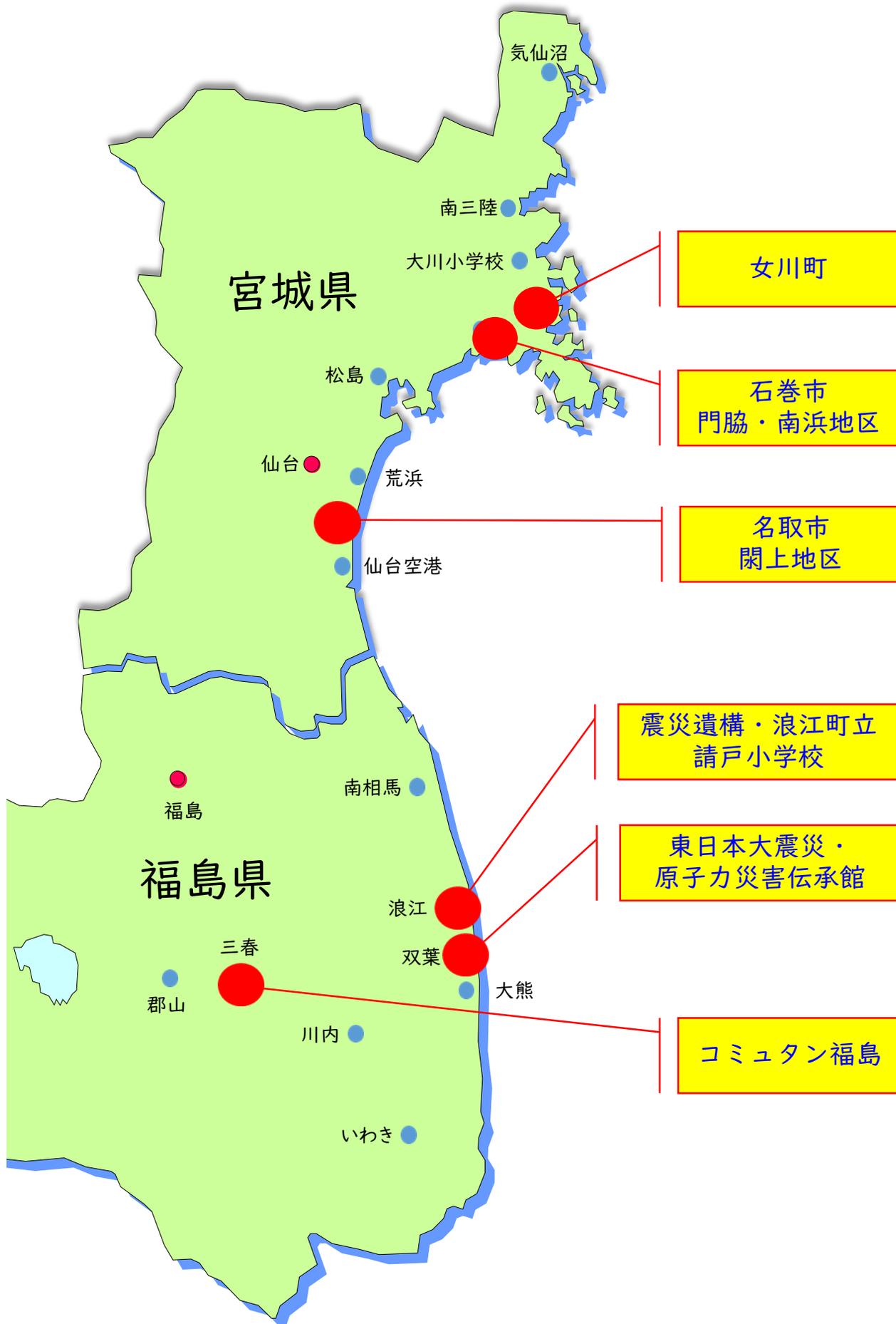


「何とか生きてるよ」

震災学習スタディツアー2024 活動報告書

支縁 ～ いつまでも忘れず、語り継ぐ

| | | |
|------|----|-----------|
| Page | 1 | 訪問地、行程 |
| | 3 | 団長総括 |
| | 5 | 参加学生のレポート |
| | 35 | 引率者レポート |
| | 36 | 参加者一覧 |



震災学習スタディツアー2024 行程

【1日目】2月11日(火・祝)

- 7:00 稲毛駅(イオン稲毛店前) 集合
- 7:15 出発、千葉北IC～圏央道～友部SA、南相馬鹿島SA(昼食休憩)を経て、名取ICまで北上。
- 13:30 閑上地区 現地踏査
閑上プラザ(閑上中学校犠牲者慰霊碑)～閑上復興公営住宅～日和山を歩く
日和山で長沼俊幸さん(閑上中央自治会長)と合流、長沼さんのご案内で、日和山～震災メモリアル公園を歩き、津波伝承祈念館「閑上の記憶」にて講話。
- 16:30 ホテルルートイン名取
到着後、夕食等自由行動
-

【2日目】2月12日(水)

- 9:00 出発、名取ICから仙台東部道路、三陸道を北上、石巻女川ICから女川町へ。
- 10:30 女川地区 現地踏査
女川いのちの広場で、田村孝行さん・弘美さん夫妻(一般社団法人健太いのちの教室)、高松康雄さんから講話。NHK仙台放送局のテレビ取材を受ける。
(翌日2月13日の「おはよう仙台」で放送された。)
その後、シーパルピア女川で昼食休憩。出発前に「震災遺構・旧女川交番」を見学。
- 13:30 石巻市門脇・南浜地区 現地踏査
佐藤美香さん(日和幼稚園遺族有志の会)から、講話。
- 17:00 ホテルルートイン名取
到着後、夕食等自由行動
-

【3日目】2月13日(木)

- 8:00 出発
- 9:30 震災遺構・浪江町立請戸小学校 見学
- 10:30 東日本大震災・原子力災害伝承館 見学
出発後、JR双葉駅前を車窓から見学し、車内にて名物・なみえ焼きそばの昼食。
- 13:30 福島県環境創造センター交流棟(コミュタン福島) 見学
現地スタッフによる、放射線や福島の実情に関する展示を見学
- 15:30 コミュタン福島 発
船引三春ICから、常磐道・圏央道を経て南下。途中、友部SAで休憩。
- 19:05 稲毛駅(イオン稲毛店前) 到着、解散。

支縁～いつまでも忘れず、語り継ぐ

団長 地域連携センター長 藤森孝幸

2011年度から本学が続けてきた宮城での震災学習の取り組みは、今回で13回目となりました。今回の「震災学習スタディツアー」は、学生30名が参加して行われました。2泊3日の今回の取り組みに参加してくれた学生諸君に、まずは感謝したいと思います。

2011年3月11日の発災から14年目の春に実施したスタディツアーは、「支縁～いつまでも忘れず、語り継ぐ」をテーマに実施されました。このテーマには、学生たちの中に東日本大震災の記憶がほとんどない者がいる時代になったことが大きな理由があります。学生たちのレポートに目を通すと、大学4年生の2人は当時小学2年生、大学1・2年生だと幼稚園や保育所に通っていた年代であることがわかります。怖かったと振り返る学生たちもいれば、ほとんど覚えていないと綴っている学生たちもいました。つまり、何の機会もなければ、本学学生の記憶からは東日本大震災は消えゆくものなのです。1000年に一度の災害と言われた東日本大震災は、「風化」という言葉で済ませていいものではありません。風化させない、忘れない、だからこそ継続的な学びの場にするというのが、このスタディツアーの意義なのです。



今回のスタディツアーでもお話しをいただいた長沼俊幸さんと夕食を共にしながら、「いまでも閑上で学校単位のお付き合いがあるのは、敬愛大学と(地元・名取市の)尚絅学院大学だけになってしまったよ」とお聞きました。実は、敬愛大学が一年間にたった2泊3日とはいえ、この地に赴いて震災学習を続けていることも意味は、この言葉にあります。震災という厳しいできごとがなければ知り合うことがなかった、私(たち)と東北で被災経験をした方々。被災者と支援者という立場で知り合ったとはいえ、長くご縁を絶やさずにいることで心が通い、旧知の知り合いのような気持ちにもなります。厳しい経験を「未来の私(たち)のために役立つなら」と話してくださる方々の思いを汲み、どれだけ自分ごとにするだろうか、考えずには居られません。

同時に、敬愛大学がこれまで宮城県や福島県でお世話になってきた方々との縁、参加した者同士の縁を絶やすことなく繋いでいることが、「支縁」という言葉に凝縮されています。この言葉は、本学で震災ボランティアについて講演をしてくださった妃乃あんじさん(元宝塚歌劇団月組、一般社団法人ハグ代表理事)による造語ですが、本学のボランティア活動のキーワードの一つにもなった大切な言葉でもあります。「最大の震災ボランティアは、忘れないことです」と講演で教えてくれたあんじさんがプレゼントしてくださった「支援から支縁へ」の言葉は、いまでも私自身の支えになっており、今回参加してくれた学生たちにその思いが届いてくれると、嬉しく思います。

ところで、東日本大震災が発生した日のことは、いつしか「サンテンイチイチ」と言われるようになりましたが、私自身にはとても違和感がある読み方です。大切な日だけど、特別な日ではないという実感だからかもしれません。なぜなら、私たちは「次に身近に災害が起きるであろう場」で学び、生活を営んでいるからです。3月11日を特別な日にしないことは、とても大切なことだと思います。

今回の震災学習スタディツアー後、新聞社2社の取材を受けました。千葉日報で掲載された記事は「敬愛大学」を前面に出したこのツアーの歴史を感じさせるものでした。読売新聞に掲載された記事は私に焦点を当てた記事になっていましたが、ここでも敬愛大学が東日本大震災の被災地と呼ばれる場所を訪問し続けている意義を丁寧に取材したものでした。本学の取り組みと思いを第三者の目で丁寧に綴ってくださった中田記者と大森記者にも、感謝いたします。

ここで、今回の参加者についてふれておきます。今回の参加者30名のうち、22名が初めての参加でした。2年生・3年生の参加が大半でしたが、人数の多少はあれど全学年・全学部から参加者があったことは、全学的な取り組みとして大切なことだと思います。また、引率に加わっていただいた佐藤孔美先生は、小学校の社会科・生活科教育の専門家の立場から、学生たちの学びを深めるためにご助言いただきました。共に学んでいただいたことに感謝いたします。



この報告書を手にした全ての方が、未だゴールのない東日本大震災の被災地の現状に思いをはせ、また近年頻発している自然災害、能登半島地震や南海トラフ地震などへの思いを繋ぎ続けてくださることを願ってやみません。

私たちが訪れた場所、伺った話は、どれも被災した街のことだけではありません。私たちが今いる街の「未来図」ですし、私たちが住む場所は「未災地」にすぎません。今は災害後ではなく、「次の災害の直前」に過ぎません。だからこそ、「敬天愛人」を建学の精神とする本学は、これからも宮城県をはじめとする震災被災地に学び続け、「支縁」と「伝承」を続けていく使命があると思うのです。

結びに、多くのご縁に改めて感謝と敬意を表します。

今回の企画実現にあたり、特に記して感謝申し上げます。

- ◆長沼俊幸様（関上中央自治会 会長）
- ◆丹野祐子様、渡邊成一様（一般社団法人関上の記憶）
- ◆田村孝行様、田村弘美様（一般社団法人健太いのちの教室）
- ◆佐藤美香様（日和幼稚園遺族有志の会）
- ◆内山太介様（NHK仙台放送局 コンテンツセンター専任記者）
- ◆大森遥都様（読売新聞東京本社千葉支局 記者）
- ◆中田大貴様（千葉日報社編集局報道部 記者）
- ◆震災遺構・浪江町立請戸小学校（指定管理者：NPO法人海族DMC）様
- ◆東日本大震災・原子力災害伝承館（指定管理者：(公財)福島イノベーション・コースト構想推進機構）様
- ◆福島県環境創造センター 様
- ◆尚綱学院大学 様
- ◆株式会社ルートインジャパン 様
- ◆せんだん亭 様
- ◆株式会社西岬観光 様

震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 1年 浦山優芽

今回の震災学習スタディツアーに参加して、この先自分が何をすべきか、どんな思いで生きていくべきなのかを知ることができた。東日本大震災の発生当時、幼く記憶のない自分にとって、本当に貴重な体験となった。

2泊3日のスタディツアーの中では、特に田村さんご夫妻のお話が印象的だった。お話をお聞きし学んだことは、「命よりも大切なものはない」ということ。自分が将来就職した後に大きな災害が起きた時、「どうしてもこの資料は守らなくては」と、仕事のことを一瞬でも考えてしまうだろうと感じた。そして「まだ大丈夫」と考えて安易に行動してしまう自分の姿を思い浮かべてしまった。だからこそ、お話を聞き、「命より大事なものはないから、とにかく高いところに逃げるのが大切だ」という学びは貴重なものだったと思う。

また、「自分の意見を言えるようになること」、「自分の命は自分で守らなければいけないこと」を改めて学ぶことができた。先生であれ、上司であれ、人間だから間違えることは誰にでもある。だからこそ、違うと思ったことは違うと声に出すこと、自分自身が考える最善の行動をとることが大切だと知る



ことができた。命より大切なものがないこと、意見を言うことが大切だとわかってはいても、実際に災害が発生した際にパニックになってしまうかもしれない。だからこそ、普段から、この思い・考えを大切にしていきたいのだ。

今回のスタディツアーを通し、私の中で災害に対しての意識が変わった。災害が起こってから行動するのでは遅いのだと強く感じた。だからこそ、避難経路や避難場所を知っておくこと、避難用品を揃えておくこと、避難場所でのどう過ごすべきか知っておくことなどを知り、実際に動けるように取り組みたいと感じた。そしてこの気づきを、家族と共有するところから始めた。

今自分にできることは、被災地の方から受け取った想いを周囲に伝えていくことだと感じている。特に災害が起こってからでは遅いこと、自分を信じ行動をすることを伝えていきたい。そして私の力で、多くの人が震災に対して意識が変わるように努めていきたい。



【私の一枚】

この写真は、名取市の閑上小中学校周辺の住宅地を訪れた時のもの。学校の校舎はもちろん、街並み全てが真新しく綺麗で衝撃を受けた。それと同時に、昔ながらのものがなく、寂しさも感じた。だからこそ「今の閑上」を忘れずに目に焼き付けたいと思い、この写真を選んだ。



震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 1年 落合凜

私が今回の震災学習スタディツアーを通して最も強く感じたものは、「上に立つ者や教育者の責任の重さ」です。私は、教員を目指しています。そんな中、今回のこの機会を通して、教育者の判断によって命を落とすことになってしまった尊い命の存在を知りました。またその反対に、教育者の判断によって助かった命の存在も知りました。教育現場の誤った判断によって命を奪われてしまう子どもたちを今後つくってはいけないと思います。正しい知識を持ってさえいれば、周りの意見を聞き入れることのできる広い視野を持ってさえいれば助けることのできた多くの命を失ってしまったという事実を受け入れることで私は精一杯でした。



私には、今回のツアーに参加したことで心に決めたことがいくつかあります。

1つ目は、「災害に関する正しい知識を身に付けること」です。自分や周りの人の命を守るためには、まず知識が必要です。身に付けた正しい知識は行動するときだけでなく、災害時の混乱状態で様々な情報が飛び交ったときの判断材料にもなります。命を守る人になりたいと強く感じました。



2つ目は、「今回学んだことや感じたことを伝えていくということ」です。知らなければ、防げるものを防げません。まずは知識として周りの人や今後関わることのできた子どもたちにたくさん伝えていきたいです。さらに、ただ起こった出来事を知ってもらっただけでなく、そこから自分たちに何ができるのか、今後の自分の人生にどのように活かしていけるのかを考えられるような伝え方を、自分の言葉でたくさんの人にしていこう

と心に決めました。

今回のツアーでは、たくさんの学びや気づきがあり、自分の視野を広げることができました。今回のこの貴重な経験を、ただの思い出にするのではなく、自分が人の命を背負う立場に立つことで不幸な結果を招くことが絶対にならないよう、学びを深めていくためのきっかけとしたいです。

【私の一枚】

この写真は、二日目に訪問した佐藤美香さんが、同じく幼稚園の判断によりお子さんを亡くした方々と建てた慰霊碑の写真です。ここに書かれている文章には、命を失うことになってしまった子どもたちの名前が入っています。同じ惨禍を絶対に繰り返してはいけないと強く感じました。



震災学習スタディツアーで学んだこと

教育学部こども教育学科 1年 清水広司

2011年3月11日14時46分に、東日本大震災が発生した。様々な地方が様々な形で被害を受けた。特に今回ツアーで向かった宮城県と福島県では、地震による二次被害の影響が大きく、津波や火災、原発の放射線等による死者が多く出た。名取市閑上では、閑上案内ガイドの方や語り部講話を中心に被害の様子やその時の苦しみを慰霊碑や災害に関連する展示物を見せたり、実際の映像を流したりして話を伺うことができた。



その中でも特に印象に残ったのは、避難生活の経験のお話だった。住んでいた町は更地となって、避難生活は「我慢する」ことが多かったそうだ。例えば、避難所にはお風呂、キッチン、洗濯機が完備されているわけではない。トイレでさえも汚れていて設備が充実していない。加えて、大人数がその中で生活上のプライバシーを保つことが難しく、ストレスや食事では同じものをずっと食べ続ける苦痛、毎日満足にお風呂に入ることができず髪を洗えない等があった。「我慢すれば大丈夫」と思っている、次第に人の心を蝕んでいき、赤ん坊や老人という自分よりも強くない人にあたってしまうようになった人もいたそうだ。ストレス



によって攻撃的な性格になってしまったのだ。しかし、その苦しみは誰も人に伝えることがなかった。なぜなら、自分より大変な人たちが周りにいる。家族を失った人がいるからこれくらい我慢しないといけない。そう思い込んでいたからだと言語部の方が述べていた。

では、「我慢する」ことがないようにするためにはどうすべきかを考えたときに、語り部の方は周りに「発信する」ことが大事なんだと伝えていた。

震災の恐怖や経験、人と人の繋がり的重要性を伝えることで、これからの対策を考えることで防災への取り組みになるため「発信する」ということを大切にしたい。

【私の一枚】

2月11日に訪問した閑上小中学校の写真です。綺麗で整えられた様子ですが、周囲を見ると住宅街も一から建て直され、新しいものになっています。

写真の下の方には、子どもたちの生きてきた証として石碑がありました。敬愛大学の学生が石碑に祈りを捧げている様子が映っています。



震災学習スタディツアーに参加して

経済学部 1年 竹田百花

私は震災学習スタディツアーに参加はしたものの、途中で風邪を引き、体調を崩してしまったため、まともに知見を得ることはできませんでした。しかし同級生や先輩方からの情報をもとに、今後教育者になる者として自分なりに考えてみました。

そもそも震災当時、私は4歳と幼く、特に地震の記憶も無く、千葉県自体も東北ほど多くの被害者や被災地は見られませんでした。そのせいか「東日本大震災」という災害を振り返ることには重きを置いていませんでした。しかし今回のスタディツアーでの被災者のお話や被災地の見学を通じて、かなり考えさせられるものがありました。その中で、先輩方から聞いたお話なのですが、印象に残っている出来事がありました。それは「旧女川交番」の現在の姿でした。



「旧女川交番」は鉄筋コンクリートの建物でしたが、東日本大震災により海中に没した交番です。鉄筋コンクリートの建物が転倒したのは日本では女川が初めてで、この建物の被災を踏まえ、復興に向けて進む人々やボランティアの方々の説明などが追加で書かれていたとのことでした。



その中で震災時当時の中学生が残したメッセージが特に印象に残りました。「今、女川町はどうなっていますか？ 悲しみて涙を流す人が少しでも減り、笑顔あふれる町になっていることを祈り、そして信じています」。この言葉を聞いた時、すごく心が熱くなりました。私たちの世代が子供たちに伝え、今を生きていかなければこのメッセージは途絶えてしまう、そう感じました。私たちは現状を見ることで、「今の女川はかなり復興が進み、きれいな街になってきていますよ」と回答ができるけれど、この経験やお話が途絶えれば今の女川の存在が薄れてきていて記憶から消されていくのではないかと心配しています。田村ご夫妻のように息子さんを亡くしている被災者の方々のお話も含め、女川町という普段普段私たちが立ち寄る機会の少ない地域の存在を、これから教育者としてしっかり情報を伝えていきたいと改めて考えさせられました。

【私の一枚】

請戸小学校の写真です。震災当日のままの姿を見て、その迫力に圧倒されました。津波の被害の大きさや生徒たちの避難が間に合わなかったらこの建物たちにつぶされていたのかと考えると恐ろしく思います。この写真やお話や動画を元に子供たちに伝えられるよううまく情報源にできたらいいなと思います。



震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 2年 池田康平

震災スタディツアー2024に参加し、語り部の皆様から、自然災害の恐ろしさと防災に対する教育の重要性を学びました。私はツアー当日まで、東日本大震災のことを「日本で最も大きな地震のひとつで、大きな被害があった」程度にしか考えていませんでしたが、3日間震災に関して様々なことを見聞して、自分が想像していたよりも遥かに大きなことが東日本大震災では起きたのだと実感することができました。

一番印象に残っているのは、2日目の午後に伺った、佐藤美香さんからのお話です。私自身が実際に教員を目指しているからこそ、当時子どもたちをまとめなければならない幼稚園の先生の判断によって、助かったはずの命が救われなかった現状があることがとても残念に思うとともに、自分が教員の立場だったらどのような対応をすれば良かったのだろうかなど、様々な話を聞いていて感じました。また、佐藤美香さんが話す長女・愛梨ちゃんの話をお聞きして心が痛む反面、このようなことが二度とあってはならないと自分の心に誓うことが出来ました。



教員を目指してはいますが、防災教育に関して今まで学ぶことは少なかったため、今回のツアーを通して実際に起きてからでは遅い、自然災害の危険性を子どもに教える立場に立つ自分たちが今のうちに沢山学ぶことが重要なのだと気づくことが出来ました。

今回のツアーの経験は決して忘れず、東日本大震災を体験していない現在の小学生のために、自分の得た知識を子どもたちに広げていくことが私はしなければならぬと感じました。

【私の一枚】

私が選んだ写真は友人と仙台駅で撮った写真です。この写真は一緒に行こうと言ってくれた友人が写っています。このメンバーは、普段はあまり遊ぶ仲間ではなかったのですが、同じツアーを通して深い関わりを持つことが出来て、人と人の関わり大切さを身に染みて感じました。



震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 2年 伊藤楓菜

私は今回、初めて震災学習スタディツアーに参加しました。様々な活動を通して、自分の知らなかった震災当時の出来事について知ることができ、それと同時に震災に対する意識が変わりました。

活動の中で特に印象的だったのは、語り部をしてくださった長沼俊幸さんや田村さんご夫妻、佐藤美香さんのお話です。実際に、津波の被害にあった場所を歩きながら当時のようすを伺うことができました。歩いた場所は新しい建物や住宅街があり、平らな土地が広がっていましたが、震災が起こる前までは多くの人々の暮らしがあったのだと思い、それらを一瞬にして奪った津波の恐ろしさを実感しました。



お話を聞いて思ったことは、「命の尊さ」や、「命を守る行動をとる」ということを考え続けなければならないことです。お話を聞く中で、震災で助けられたはずの命があったことを知り、尊い命が失われた悲しみとともに、命を最優先にする行動をとることの大切さを学びました。震災での出来事を他人事で考えるのではなく、私たちに置き換えて一人ひとりが震災についての意識を向けて行動することが



が必要であると思います。そのためには、自分の住んでいる地域の地形を理解して、連携をとったり、避難訓練の重要性を発信したりすることで、自分自身や大切な人の命を守ることに繋がります。また、今回語り部をしてくださった方々から、「バトンは皆さんにお渡しします」という言葉を受け取りました。私たちがができることはそのバトンをしっかりと受け継ぎ、未来に向けて多くの人々に震災の記憶や教訓を伝え続け、実践していくことだと思いました。

今回の震災学習スタディツアーでは、震災について多くの学びを得ることができ、貴重な体験をさせてもらったことに感謝しています。また、訪れた場所で出逢うことのできた方々はとても温かく私たちを迎えてくださり、この出逢いを大切に、震災を語り継いでいきたいです。

【私の一枚】

3日目に訪問した、双葉町の東日本大震災・原子力災害伝承館で展示されていた写真です。2011年から2020年までの「3月11日」のようすが写し出されています。この写真を見て、愛する人を失った人々や被災地を思う人々の姿が写し出されていて、私は涙が込み上げながら、この日を忘れてはいけなかったと思いました。



みんなで語り継ごう

経済学部経済学科 2年 稲村優希

私自身は東日本大震災で避難所生活を経験したことがなかったので、閉上中央自治会長の長沼俊幸さんから当時の状況・避難所生活等の貴重なお話を伺うことができたことを有意義に感じる事ができた。地域・企業・教育の連携の大切さや十数年経って新しい街ができて、俺たちの心の中では災害は終わらずに、続く思いをバトンで受け取り、しっかりと責任をもって、語り継いでいこうと思った。



2月12日女川町で田村孝行・弘美ご夫妻からお話を拝聴して、「いかなる場合も、上司の指示に従って行動することが絶対なのか」と疑問をもった。それは田村孝行・弘美ご夫妻が健太さんと同じ職場で勤務していた社員から聞いた、健太さんと上司とのやりとりである。すぐ目の前に津波が向かってきている危険な状態の中、健太さん達が上司に面と向かって「町の高台に逃げましょう」と進言したにも関わらず、建物の屋上への避難を指示があったこと。また目上の人に口答えを行えば、出世等に影響してしまう考え方があること。このような考え方に左右されなければ、健太さんをはじめ尊い命は失われずに済んだと思う。



また健太さんの感情を想像すると、上司の指示で行動しないといけない無念さ、津波を目前にして心に留めたであろう思い、それまで長い時を過ごした思い出を思い返すとともに、育ててきてくれた家族への感謝の気持ち等が思い浮かんできたと思う。そのような状況下でも「諦めるもんか、俺は生き抜いてやる」との思いを胸に黒くうねる海に一人で飛び込んでいった健太さんの勇気ある行動が力強く感じた。どんなに悲

しんでも、怒りがこみ上げてきても、救えた命だと考えるとただ、悔しい気持ちでいっぱいになる。

同日に佐藤美香さんからお話を伺い、たくさん式を重ねて、心身ともに成長した姿を見たかった思い、様々な経験を共に生きてきたかったなどの思いとともに「いってらっしゃい」と朝送り出した愛娘がご遺体で発見されたと思うと様々な思いが胸を縛りつけ、心のはち切れそうになり涙が止まらない。なぜ、あの日、子ども達を助けに行かなかったのか未だに、疑問をもつ。

【私の一枚】

東日本大震災・原子力災害伝承館に展示されている写真です。この岩手県大槌町にある「風の電話」の写真を見ると、この世にはもういないと知りつつも、「天国への黒電話」で相手の声を聞きたくなり、日頃の出来事を語り合い、思いを伝えたい。時に、辛くなるかもしれない。それでも、私たちの見えない所で支え、強い心を育ませていると感じる。



震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科2年 尾倉帆香

今回震災スタディツアーに参加して特に感じたことは、震災を経験したからこそ伝えられることがあるということだ。私自身も東日本大震災でいつもとは違う感覚を感じた経験があるので、テレビでの映像を通して地震や津波の様子や避難所での生活を見たりしたことで、震災を理解したつもりでいた。しかし、実際に被災した人のお話を聞き、理解が足りなかったと感じた。



このスタディツアーで印象に残っていることは、2日目の田村さん夫妻のお話だ。田村さん夫妻は、震災で銀行員の息子さんを亡くされた。上司の指示で、銀行の屋上に留まることとなり、高台に逃げられなかったのだそうだ。この要因として考えたときに、今の日本は「上役の言うことには従わなければならない文化」があるように感じると日常を振り返った。そのため、自分が正しいと思ったことを信じられるように、生きよう。教師になる上で、児童たちに「自分の命は自分で守るのだ」と伝えていきたい。

そして一番心苦しかったのが、美香さんのお話だ。美香さんは、震災で娘の愛梨さんをなくされている。更に娘の愛梨さんが生きていたら私と同年だったということでも気になる内容だった。愛梨



さんは、幼稚園の管理下のもとではあったが、信じられない判断で亡くなってしまった。私は、幼稚園に怒りを感じたが、いつもと違ったことが起きると、人は正常な判断ができなくなるのだと、感じた。しかし「仕方がない」ではかたづけられないのが現状であり、日々の避難訓練が誤った判断をしない大切なものと学ぶことができた。

このステディツアーでは、楽しい部分もありつつ、実際に被災した方々のお話や震災現場を見ることで、誰が来ても何かを感じるだろうと思うものだった。地震国の日本をより知るものとしていろいろな人に参加してほしいと思った。また、この経験を周りの人に伝え、知識や興味として持ってもらえるよう、もっと学び何ができるか、考えていきたい。

【私の一枚】

この写真は、美香さんの話を聞きながら、実際に幼稚園バスのあった小学校から幼稚園まで歩いた時の写真だ。実際の道を、説明を聞きながら歩くので、より震災をリアルに感じる経験だった。震災後にこの高台に行くために作られた階段に、「優しさが足りない」といっていたことが特に印象に残っている。



震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 2年 小滝愛斗

東日本大震災から約14年。今回のスタディツアーを通じて、私は多くのことを学び、心に残る経験をした。このツアーでは、震災の実際の現場を訪れ、被災地の状況や復興の過程を直接感じ取ることができた。特に、震災が引き起こした人的・物的な被害やその後の復興に向けた努力、そして被災者の方々の悲痛な思いや強い意志に触れ、改めて災害の恐ろしさと人々の力強さを実感した。



語り部の方からお話を聞いた中で、特に印象に残ったのは、女川の田村さんのお話だった。田村さんは当時25歳、七十七銀行女川支店で勤務していた息子の健太さんを東日本大震災で亡くされた。健太さんは自分の判断で高台に行こうとしたが、銀行の支店長の指示に従わざるを得なかった。勤務している銀行から避難所だった堀切山まで、歩いて3分、走れば1分で行ける距離であることから、災害が起きた際の一瞬の判断が人生を決めるのだと思うと怖くなった。教員を目指している自分は、いずれ多くの児童や生徒の生命を預かることになる。迅速かつ冷静な判断ができるようにするためには、日頃から防災意識の



重要性について認識する必要がある。震災から学ぶべき最も重要なことは、自然災害に対する備えをしっかりとすることであると考える。何年後に震災が起こるかはわからないが、近年のうちに起こると大きな地震や津波が起こるであろうと騒がれている。震災は誰にも止められない。私たちができるのは震災が起こったときにどのような行動を取るべきかを考えることである。過去の震災から多くのことを学び、実際に行動

することが、被災者の方々の願いであると思う。

このスタディツアーを通じて、私たちは単に震災の歴史を学ぶだけでなく、自然災害がもたらす影響とそれに対する備えや復興の重要性を実感した。震災の記憶を風化させることなく、語り継いでいきたい。

【私の一枚】

この写真は、2月13日(木)に、震災遺構・浪江町立請戸小学校で撮影した写真である。短い時間でしか見学することができなかったが、自分自身の目でみた中で、最も震災の恐ろしさを感じることができ一枚だと思う。



忘れてはいけないこと

教育学部こども教育学科 2年 川瀬葵晴

名取市閑上地区で長沼俊幸さんがおっしゃっていた「震災は終わらない」という言葉が、ずっと心に残っている。一見瓦礫が撤去され綺麗になったとしても、心の傷はずっと消えないのだ。閑上では「この街には津波が来ない」と言われていた。そのため逃げ遅れた犠牲者がとても多かったという。良い情報ばかりを信じたくなるが、正しい知識を持つということが大切だと感じた。明日が来るのは当たり前ではなく、失ってから気付くのでは遅いということを学んだ。東日本大震災で得られた教訓は後世に語り継いでいかなくてはならないと感じた。



石巻市南浜では、佐藤美香さんからお話を聞いた。日和幼稚園での出来事は、今回のスタディツアーの中で一番印象に残っている。幼稚園側が正しい対応をしていれば救える命だった。何度も救えるチャンスがあったのに命を失うことになってしまった無念さは、話を聞いた私でも憤りを覚えたのに、佐藤さんはもっと計り知れない悲しみや怒りを感じたのだろうと思うと辛く苦しい気持ちになった。愛梨さんは生きていれば私と同年だった。「成人式はどうだった？ 娘の振り袖姿見たかったなあ」と話している佐藤さんを見て、胸が張り裂けるような思いがした。成人式を迎えられるのは当たり前のことではないということを感じた。



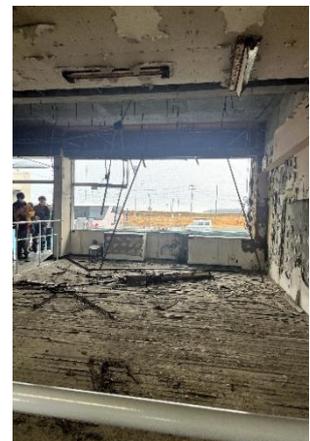
最後に、今回のスタディツアーに参加して当時のことを思い出した。私が震災を経験したのは、保育園の年長だった。あまり当時の記憶がなく震災のニュースや特集を見てもどこか他人事だった。しかし、スタディツアーを通して自分ごととしてこの震災に向き合っていないといけないと感じた。実際に被災した人たちから聞いた話は心が苦しくなる話ばかりだった。忘れてはいけない教訓もたくさん聞いた。私が教師になって教えていく児童は震災を経験していない世代である。その児童たちにどうやって自分事として捉えてもらうのか考えていきたい。

最後に、今回のスタディツアーに参加して当時のことを思い出した。私が震災を経験したのは、保育園の年長だった。あまり当時の記憶がなく震災のニュースや特集を見てもどこか他人事だった。しかし、スタディツアーを通して自分ごととして

この震災に向き合っていないといけないと感じた。実際に被災した人たちから聞いた話は心が苦しくなる話ばかりだった。忘れてはいけない教訓もたくさん聞いた。私が教師になって教えていく児童は震災を経験していない世代である。その児童たちにどうやって自分事として捉えてもらうのか考えていきたい。

【私の一枚】

2月13日に訪問した、震災遺構・浪江町立請戸小学校での写真です。大きな被害を受けましたが、全員が無事避難することができた奇跡の学校としても知られています。この震災遺構から津波の恐ろしさだけでなく避難することができた経験を学ぶことができました。教師の迅速な対応や正しい判断力は見習っていないといけないと思いました。



震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 2年 君島義啓

今回初めて、震災学習スタディツアーに参加しました。震災を体験された方々のお話をお聞きしたり、被災地となった街を見て回ったりしながら、様々なことを学びました。

私も幼い頃、東日本大震災を経験しました。しかし、そこまで身に回りへの被害が大きくなく、今まで他人ごとのように捉えてきました。しかしお話を聞く中で、被害が甚大だった地域では、身近な方が亡くなってしまったり、津波により住む場所を失ったりと、辛い経験をされている方がいました。まだ親族の行方が分からず探していたり、思い出したくないであろう辛い過去をお話していただいたり、同じことが起きないように伝えてくださっている方がいることを知り、自分でも何かできることをしようと思いました。

まず、身近でできることとして、しっかりと祈りを捧げようと思いました。また、将来教員になった際には、しっかりとこのような過去があったと震災のことを伝える時間を設けたいです。

お話を聞く中で一番学んだことは、災害に巻き込まれた際にはしっかりと判断をすることです。亡くなった方の中で、逃げる選択をせず、地震後の火災や津波によって命を落としてしまった方がいたとお聞きしました。判断一つで救えた命が多くありました。震災が起きた際には、自分の位置や周りの状況を理解し、適切に判断し、行動できるようにしなければなりません。身の回りの避難場所やいざという時の持ち出し品をそろえるなど自分でもすぐに行える対策をしておきたいです。



【私の一枚】

2月11日の夜に訪れた、仙台駅の写真です。初めて仙台駅に行きました。善次郎というお店で牛タンをいただきました。今まで食べてきた牛タンの中で一番おいしかったです。普通の牛タンと違い口の中に入れるととろけるような油が乗っており、柔らかくもしっかりと歯ごたえがあっておいしかったです。



震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 2年 黒田つかさ

東日本大震災は、終わったことではありません。今回のスタディツアーに参加し、東日本大震災から14年が経った今でも、震災に苦しめられている人が沢山いることを知りました。1日目は、宮城県名取市閑上地区の長沼さんにお話をいただきました。閑上地区は昔に津波の被害に遭っていました。しかし、東日本大震災の当時、閑上住んでいた人達はそのことを知らず、「閑上は津波が来ない」と言われていたそうです。そのため、閑上の人々はみんな津波についての知識がなく、津波が来る、と言われても避難をしない人が多くいました。今の閑上に東日本大震災の前と同じ姿で残っているのは日和山ただ一つだけです。「知らない」ということが本当に恐ろしいことである、ということを実感しました。



2日目には、宮城県石巻市の佐藤さんにお話をいただきました。火災によって亡くなった5人の子どもたちは、風が吹くだけでホロホロと崩れ落ちてしまうほど真っ黒に焼け焦げた姿で発見されました。もし、自分の家族がそんな姿で亡くなっていたら。想像することもできず、ただただ苦しい気持ち



になりました。お話の中で、佐藤さんは何度も「助けられた生命だったと思っている」、そうおっしゃっていました。幼稚園の先生が誘導して、あと数十メートル歩いて避難していれば助かった生命です。私は、佐藤さんのお話を聞いて、将来教員を目指す立場として、子どもの命を預かるという責任を再認識しました。災害が起こった時、子どもたちが信じられるのは目の前にいる先生だけです。私は、もしもの時に子ども達から頼りにされる存在である、私が子ども達の命を守らなければならない、そう感じました。

今回のスタディツアーでの経験を忘れず、自分の耳で聞いたもの目で見たものを、色んな人に伝えていけるよう、これからも自分で学び続けていきたいです。

【私の一枚】

2月12日に宮城県石巻市を訪問し、佐藤美香さんからお話を伺った際の写真です。佐藤さんは東日本大震災で当時6歳だった長女の愛梨ちゃんを亡くされています。たった数十メートル歩いて避難することができていれば助かった命です。幼稚園の先生の誤った判断により、5人の命が津波によって引き起こされた火災により奪われました。



震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 2年 近藤愛美

今回スタディツアーに参加して、震災に対する考え方が大きく変わりました。これまでも、テレビの特集などで当時の被害の状況や、被災した方々のインタビュー映像を見たりしたことはありました。しかし、テレビなどのメディアを通じた情報は被害の全貌を報道するために、『被災者が〇〇名、行方不明者〇〇名』などと言われることも多く、数字を意識して聴いてしまうことが多々ありました。そのため、実際に被災された方一人ひとりのお話を詳しく見聞きしたことはありませんでした。ですから今回の震災学習で様々な場所を実際に訪れてお話を伺うことができて、非常に良かったと感じています。一人一人から時間をかけて当時の状況をお聞きする、というのは実際に現場に足を運んで直接お会いしないと難しいことだと思うので、非常に貴重な経験をさせていただきました。



中でも特に印象に残っているのは、2日目に石巻市で聞いた佐藤さんのお話です。教育の現場が関わる出来事だったこと、被害にあって亡くなったお嬢さんがもし生きていれば私と同じ年齢だったこともあり、より自分ごととして捉えながらお話を聞くことが出来ました。お話を聞いている最中、私自身



もやり切れない気持ちになる場面が多々あり、赤の他人である私もこんな気持ちになるのだから、母親である佐藤さんは一体どんな気持ちだったんだろうと、とても苦しい気持ちになりました。

そして、改めて教員という仕事の責任の重さを実感しました。家から離れて学校で勉強をしている時間は、言い換えれば親御さんからお子様を預かっていることにもなります。人の命を預かるという、その重さを再認識しました。3日目に訪れた請戸小学校では被害が0であったと聞き実際の展示を見て、教育現場の判断次第で子どもの命はいくらでも救うことが出来ると感じました。子ども達の安全を第一に考えた判断が出来るようにしようと思いました。

【私の一枚】

この写真は、請戸小学校に展示されていたものです。非常に海に近い学校であったにも関わらず犠牲者が1人も出なかったと聞いて、とても驚きました。子どもの安全を第一に考えて、早めに避難することの重要性を改めて感じました。



震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 2年 櫻井友駿

私は2月11日から13日の間、宮城と福島に震災学習ツアーとして行き、これまでの人生で初めてとなる経験や体験を沢山した。実際に現地で被災にあった方や避難所と仮設住宅で長い間生活していた方、わが子を亡くしてしまった方の話を聴くことで、私が幼稚園生だったころの震災が現実味を帯び、改めて震災は怖いと直感的に感じてしまった。しかし、次の世代にこの災害のことをしっかりと伝えることの大切さも感じられた。



はじめに名取市の閑上で、長沼さんから直接お話しをお聴きした。その地域では津波はあまりこないだろうと親から言われていたが、実際に震災が起きた時は時速34キロもの速さで、高さ8mほどの津波が起こってしまった。私自身も津波は来ないだろうと考えすぎず、いざ起きた時の避難経路をしっかりと確認しようと心がけようと考えた。長沼さんからは避難所での生活の様子についての話も伺った。それぞれがプライベートのない空間であり、段ボールという仕切りがとても大切であることを知った。たかがダンボールでも床に座ると周りの人が見えなくなって少し安心できるとおっしゃっていた。このような知識は実際にお聞き



きしなければ知ることはできなかったと考えられる。

特に衝撃をうけたことは震災遺構の小学校である。その様子はバスから見た時からとても心にくるものであり、その校舎の中を実際に目で見ることで災害によっていままでの日常の情景が壊れてしまうことが伝わった。

3日間のツアーを通して、東日本大震災がさまざまな人に影響を与えてしまったのかしっかりと学習することがわかった。震災はまだ終わっていないという言葉を知り、私は幸せでいいのかと思ってしまったが、この学びをいろんな人に伝えていくことが次世代につなげる一歩であると考えた。私自身、将来は教員を目指しているため、まずは児童にどのようにしたら、震災について教え、伝えられるのか考えることから始めようと思った。

【私の一枚】

2月12日に佐藤さんに話をお聞きしたときに撮った門脇小学校の校舎の様子です。門脇小学校は地震、津波、火災を受けてしまった学校であり、いつも通り児童が過ごしていた教室の面影がほぼなく、壊されてしまった様子がわかる。また津波が来た高さが汚れを通してわかり、津波に対して強い恐怖心が強まった。



震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 2年 佐藤晴輝

今回の震災学習スタディツアーに参加して、特に印象に残ったことは、岩手県石巻市南浜の佐藤美香さん（日和幼稚園遺族有志の会）のお話です。

佐藤さんには、2011年3月11日に起こった東日本大震災で私と同じ歳の愛梨ちゃんを失ったお話をしていただきました。お話を聞くと、愛梨ちゃんは震災による津波で亡くなったのではなく、津波の影響で発生した火災に巻き込まれてしまったこと。地震の後に幼稚園のバスが丘の上にある保育園を出発し、園児たちを家に返そうとしたために、愛梨ちゃんたちが命を落とすことになってしまったこと。バスの運転手は無事に助かったのに、バスに乗っていた園児たちは助からなかったということを知りました。



この話を聞いて私は、「もし、バスが保育園を出発しなければ、愛梨ちゃんは助かったのではないか」とい思いました。また、「なんでバスの運転手は、園児たちを置いて行ってしまったのか」という疑問も出てきました。バスの運転手は幼稚園の職員として、子どもたちの安全を第一に考えるべきだったのではないかと思います。やるせない気持ちが募ります。



愛梨ちゃんは今年20歳。一緒に成人式を迎えていたかもしれせん。そのことを考えると、私と同じ歳の愛梨ちゃんの未来が奪われたことの無念さに胸が苦しくなります。また、私たちが日常生活の中でどれだけの幸せを当然のように享受しているのかを再認識させられます。

今回、佐藤さんのお話を聞いて、震災の影響を受けた多くの人々の中で、愛梨ちゃんのように幼く、無邪気な子どもたちの未来が奪われることが、どれほど悲しいことであるかを、私たちは決して忘れてはいけな思いました。また、このような悲劇が二度と起こらないようにするためには教員になった時に、私たちは何ができるのか、子どもたちにどのように伝えていかなければいけないのかななどを、真剣に考え、後世に伝えていく必要があると思いました。

【私の一枚】

2月12日に訪問した女川いのちの広場で田村さん夫妻に息子さんの健太さんが亡くなってしまった時の状況を詳しくお話をしていただいている写真です。私たち敬愛大学の学生約30人と、一般社団法人健太いのちの教室の田村孝行さんが写っています。

どんなものよりも自分の命が一番大切だということを改めて学ぶことができました。



震災学習スタディツアーに参加して感じたこと

教育学部こども教育学科2年 鈴木唯人

東日本大震災が起こったとき、私は保育園年長組でお昼寝の時間中でした。そのため、記憶も曖昧でしたし、当時の出来事について深く知ろうとは思ったことはありませんでした。しかし、教員になろうと思っている今、震災について自分が深く知り、子どもたちに事実を知ってもらおうと思い、今回のスタディツアーに参加しようと思いました。



今回のツアーで心に残ったことがいくつかあります。一つ目は「避難先での生活の苦しさ」です。教科書などに載っている写真だけでは分からなかった苦しさを知ることができました。段ボールで区切って避難所生活を送る際、段ボールの高さが気になる点であると伺いました。これは、避難所生活を経験した人しか分からないことだと思い、子どもたちに伝えていきたいと思いました。

二つ目は「津波に対する意識の低さ」です。閑上は海に面しているにも関わらず、津波は来ないと昔から言われていました。そのため、実際に津波が来た際、住民は混乱し、避難行動が遅れたりして、多くの犠牲者が出てしまいました。私の故郷、千葉県鴨川市も海に面している場所ですが、祖父母の



世代は、地震が来ても津波は来ないと言っています。自分が住んでいる土地で同じ事が今後起きないためにも、自分なりに発信していこうと思いました。

三つ目は「行動することの重要さと今のこの日常が当たり前ではない」ということです。一人で決断し行動する決断力を持つこと、そしてそれを伝える発言力を持つこと、これらのごことを大切に、今後生活していきたいと心新たにしました。

「今この日常に感謝を忘れてはいけない」と、佐藤美香さんのお話を伺って感じました。

【私の一枚】

初日の夕食でいただいた、牛タンの写真です。こんなにおいしい牛タンを食べたのは初めてでした。友達と震災について思ったことなどを話しながらご飯を食べて、有意義な時間になり、とても良かったです。

今回だけで震災について全部を理解することはできなかったのですが、来年も参加したいと思います。



震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 2年 高取賢太郎

正直に言うと、私はもともと「東北地方の美味しいものを食べたり、思い出を作ったりできるだろう」と軽い気持ちでこのスタディツアーに参加を考えていました。「宮城や福島ってどんなところだろう」「泊まるホテルはどんな感じなのだろう」ということしか考えていませんでした。しかし、日程を経て被災者の方々と接するうちにそのような考えは薄れていき、真摯に「災害」というものについて考えるようになりました。



「閑上の記憶」で長沼さんにお話を伺った際は、ご自身の身の上話や先人の言葉が書いてある石碑の話など、貴重なお話を聞くことができました。その中でも一番印象に残っているのは、「自分が住んでいる町が危険だと思って暮らしている人はいない」という言葉です。東日本大震災や能登半島の地震や水害など、日本で起きている大災害にも関わらず、自分とは直接関係のないどこか他人事に思っていた節があります。しかし、今回お話を聞いたことで、災害について真剣に考えようと思えるようになりました。

田村さんご夫妻からは、企業が「災害」についてどのような意識を持っているか、持っていなければならないかというお話を聞くことができました。「人の命より大事なものは無い」ということ、「自分の命は自分だけのものではない、みんなに支えられて生きてきたのだから」という言葉が特に心に残りました。ご夫妻の息子さんは銀行に勤務しており、業務を優先させられて避難できずに亡くなったといえます。



佐藤美香さんからは、人の子どもを預かるということがどれだけ責任が重いのか教えていただきました。美香さんの娘さんは当時幼稚園生で、現場の先生の判断ミスにより亡くなってしまったそうです。「助かる命だった」という言葉を何度も口にする佐藤さんが、どれだけ無念だったのか気持ちが伝わってきました。教育現場で起きた事故ということもあり、自分ごととして考えるきっかけになったと思います。

今回学んだことを伝え続け、「縁」を大切にしていきたいと思います。

【私の一枚】

この写真は、2日目の佐藤美香さんのお話を聞いた後、亡くなった園児たちの名前が入っている詩が刻まれている石碑の前で撮った写真です。現場の判断ミスにより多くの命が失われてしまったことを知りました。自分も将来尊い命を預かる者として、責任をしっかりと果たしたいと思います。



震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科2年 堀野果瑚

今回初めて震災学習スタディツアーに参加して、多くのものを目にした。東日本大震災は14年前に突然やってきて、大きな影響を与えた。私自身も大きな被害には至らなくともそれに直面した。だがしかし、現在20歳の私は、当時幼稚園年長の6歳であった。人によっては記憶に深く刻まれていることもあるだろうが、私はほぼ全く記憶に残ってはいない。ということは私より年下の年齢の子どもたちは、東日本大震災のことを知らない子の方が多いということだ。つまり、これからのこどもたちには、遠い昔のお話のように聞こえてしまう。私はこの震災が忘れ去られる未来はどうしても避けたい。未来に向かうために過去を知りたいし、極力同じ轍を踏まないようにしたい。「何となく知っている私」がこのツアーを経て「伝えていきたい私」に変わった。



実際にはどんな被害があったのか、当時の状況はどうだったのか、人々は何を感じたのか、どんな影響を与えたのかをごく一部ではあるが、私たちは見て、聞いて、知って、感じて、学んだ。あとは、それを少しでもいいから伝えるだけ。だからこのレポートを通して伝えようと思う。



3日間の中で特に印象に残ったのは、佐藤美香さんのお話である。実際に私たちを当時の場所に連れながら語り部をしてくださったので、私たちも実際に体で感じながら様々なことに思いを馳せた。そこでは幼稚園に預けていた娘が、幼稚園側の判断ミスによりその子を含めた5名の園児の命が失われたという。犠牲になってしまった佐藤愛梨ちゃんは、生きていれば私と同年の子であった。ということは、美香さんは私の母親ときっと年齢が近いだろう。私は話を聞きながら、美香さんと私の母親を重ねて考えてしまい、とても辛くなった。話を聞けば聞くほど、「こうできたのに、ああすればよかったのに」と考えた。実際には幼稚園側がどんな思いだったのかは分からないが、命を預かっている以上、責任をもって行動する必要があると考える。私は小学校教諭といふこども達の未来を支える仕事に就くことを目指しているの、今回話を聞いて私の心を奮い立たせた。救えた命は絶対に失ってはならない。そう強く思う。

【私の一枚】

いつも大学で一緒に過ごしている仲間と牛タンを食べに行った時の写真。1人ではこのツアーに参加しようとは思わなかったし、共に学べ、共に思い出を作れ、本当によかったと思う。

このツアーで得た学びを私たちが繋げていく。宮城県は食べ物も美味しい素敵な場所です。まずは共に過ごした仲間へ感謝。



東日本大震災を知って

教育学部こども教育学科 2年 宮手花林

震災学習スタディツアーを通して、私の知識、経験、考えは震災の一部に過ぎなかったと痛感し、本当の意味での命の大切さ、本当の震災を知ることができた。

東日本大震災が起きた時、私は保育所の年長組だった。私が住んでいたところは地震が起きた後もそれほどの被害はなく、学校、保育所、家、道路、ほとんどが崩壊せずきれいに残っていた。そのため、学校に行けず困った記憶はなく、すぐに普段の生活に戻ることができた。水道、電気が使えなかったもののすぐ復旧し何不自由なく生活していた。このような記憶しかもっていなかったのだ。ただ、大きな地震が起きて大変だったということだけだ。実際に見て、語り部の方々の話を聞かなければ、本当の震災について知ることができなかったと今になって感じる。

なかでも、2日目にお話をしてくださった息子さんを津波によって亡くされた田沼ご夫妻の言葉が印象に残っている。「命は自分だけのものではない。ここまで育ててくれた人のものでもある」という言葉だ。家族だけではなく、いままで関わってくれた人たちの命でもあるとおっしゃっていた。この言葉だけ



け聞くと「そうに決まっている」と思うかもしれない。だが、この言葉はそれほど軽いものではない。実際、田沼ご夫妻の話を聞き、想像することしかできなかったがとても悲しく、やるせない気持ちになった。今でも忘れられない。私は家に帰った後この言葉について、どのような意味が込められているのか、私はその言葉を聞いてどう感じたか深く考えた。私は、人が亡くなるというのは関わりのあった人だけでなく、世界中

の人が悲しむことだと考えた。家族、友人、同僚だけでなく、語り部の方から当時の話を聞いた人、話を聞いた人から聞いた人、たくさんの方がその事実を知り悲しむ。私が実際に津波を経験したわけでも、身近な人を亡くしたわけではない。だが、命が亡くなるということはそれほどのことだと感じた。

【私の一枚】

この写真は閑上の記憶へ向かう途中にある閑上漁港です。長沼さんに案内してもらいながら、この広浦川という川の横を歩きました。この奥に見える白い建物のもっと奥に海が広がっていました。ここから津波が来て、この写真よりも少し離れたところで津波の高さ8.4mだったと聞いたときはぞっとしました。穏やかな波が怖く感じました。



震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 3年 伊藤瑞希

東日本大震災から14年が経とうとする機会に、震災学習スタディツアーに初めて参加しました。私は「教職たまごプロジェクト」で児童と話していた際に、東日本大震災を経験していないことを知りました。そこで、東日本大震災を経験していない子どもたちに災害の恐ろしさや防災について伝えていかなければならないと思い、参加しました。

1日目は、名取市閑上地区の現地踏査をし、「閑上の記憶」でお話を聞きました。私が閑上地区を初めて見て感じたことは、とてもきれいな街だなということでした。しかし、「災害は終わらない」という言葉を聞き、震災が起こる前には戻らないのだと実感すると同時に、津波の恐ろしさを知りました。また、実際に災害にあった方のお話を聞き、津波に関心がなく、「ここには津波は来ない」という思い込みによって、より大きな被害になってしまったのだと知りました。



2日目は、石巻市でお話を聞きました。門脇小学校では、津波の被害だけでなく火災による被害にあった校舎を見ました。門脇小学校は、地震、津波、火災の3つの被害にあったと聞き、次から次へと



襲い掛かる災害から身を守るためにはどうしたらよいか考えるきっかけになりました。また、日和幼稚園に通っていた子どもたちは、「本来ならば助かっていた命だ」と聞きました。教師を目指す学生として、子どもたちの命を第一優先で考え、管理下で命をなくすことがあってはならないと強く感じました。

3日目は、福島県で起きた原子力発電所の事故について学びました。道中には、未だ自宅に帰ることができない方もいると聞き、震災は終わっていないのだと痛感しました。見えない放射線から避難する方々や避難所での生活について学ぶことができました。

3日間を通して、自分の身は自分で守ること、避難訓練の重要性について学びました。いただいたバトン子どもたちにも伝え、同じ過ちを繰り返さないよう多くの人に知ってもらいたいと感じました。

【私の一枚】

この写真は、3日目に訪問した震災遺構の浪江町立請戸小学校です。津波によって、机や椅子が流されてしまい、黒板だけが残っている状態の教室が当時のまま残されています。丈夫だとされている学校が、吹き抜けになってしまうほどの威力をもつ津波の恐ろしさを身に染みて感じました。



震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 3年 小野美智子

東日本大震災が起こって、14年が経ちました。年月が流れるほど記憶が薄れていきますが、近年でも、石川県能登半島地震や台風などの自然災害が各自で起こっています。このような震災時のニュースを見た時は、「自分のところに被害がなくて良かった」としか考えていなかったのですが、このツアーを通して、震災を人ごとにはしてはいけないし、忘れてはいけないことだということを強く感じる事ができました。



1日目は、名取市の閑上に行き、閑上日和山で長沼さんから被災した際の被災地についてのお話を聞くことが出来ました。被災地での出来事は、ニュースで取り上げることが全くなかったため、「何が必要か」「どんなものを用意すればいいのか」について学ぶことが出来ました。また、知っているのと知らないのでは行動の仕方が変わるため、実際にお話を聞くことは大切だということ学びました。

2日目は女川町と石巻市に向かい、田村さんご夫妻のお話と佐藤美香さんからお話を伺いました。特に印象に残ったのは、日和幼稚園の管理下で長女の愛梨ちゃんをなくしたお話でした。当時の状



況を実際に街歩きをしながらお話を伺うと、日和幼稚園までは5分ほどで到着してしまうほどの近さでした。この近さがありながら、園児を置いて帰っていく職員たちには話を聞きながら、とても憤りを感じました。また、子どもたちを守るための迅速な判断がいかに重要なことであることを学びました。

3日目には、福島の大葉町に行き、放射線について学びました。私は、幼少期爆発したことについては知っていたが、どのような原因があって爆発し、どのように放射線がまき散らされていたのかを改めて学ぶことが出来ました。

【私の一枚】

仙台駅でいただいた牛タンです。今年は、去年も一緒に参加したメンバー+1の計5人で食べに行きました。食べに行ったお店で奇跡がありました。案内されたのは、なんと去年と同じ場所、同じ席だったのです。

皆さんも、是非機会があったら「牛タン伊勢屋」で食べてみてください。



生きるために、命を守るために

教育学部子ども教育学科 3年 加藤凜花

今回で3回目の参加となる震災学習スタディツアー。訪れた場所たちとはとても強い風と共に当時の様々な厳しさを教えてくれているようだった。

1日目は宮城県名取市閑上地区を訪れた。今年も長沼さんにお話を伺うことができた。3.11当時のご自身の様子、避難所生活についてお話してくださいました。特に避難所生活のお話はとても興味深かった。「物資は災害翌日から届く。トイレやお風呂はなかなか入れない。だが、我慢できる範囲だから誰も何も言わない。」と長沼さんは仰っていた。たしかに、今まで避難所生活の話はあまり聞いたことがない。どんなことが大変なのか、何が必要なのか避難所生活をしたことのない人間にはよくわからない。だからなのだろうか、能登で起きた震災の避難生活のニュースを見たとき、14年前と変わらない避難所に驚いた。あの日から10年以上経ち、便利なもの、少しでも避難生活が快適になるようなものは発明されているのに変わらない。災害について何事も「知らない」というのは恐ろしいことだと改めて気付いた。「命を守る行動」は災害時だけでなく、その後の生活にも必要なことだと学んだ。



2日目は、女川町で息子さんの健太さんを亡くされた田村さんご夫妻のお話を聞いた。3.11当時、健太さんは海沿いにある七十七銀行の女川支店に勤めていた。女川町には堀切山という山があり、高台のため、津波が来たらそこへ逃げると地元の人たちは認識していた。地元の人たちはみな堀切山へ逃げていた。ところが健太さんたち行員は会社の指示で店の屋上へ避難した。しかし津波に飲み込まれ、亡くなってしまった。

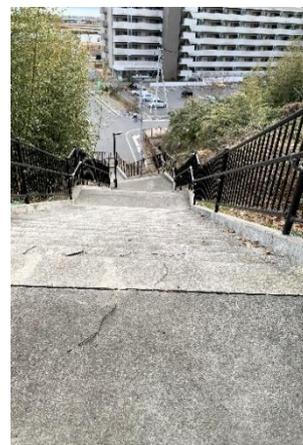
「命より大事な仕事なんか無いんだ。」と田村さんは仰った。「おかしい」と思いながらも、何も言えずに会社の指示通り避難し、命を落とした健太さん。「自分の命は自分で守る」ことの大切さを教えてくれているようだった。

自分が教員になったとき、命の尊さを、自分の命は自分で守ることの大切さを伝えていきたい。

【私の一枚】

門脇小学校の裏山に震災後にできた避難階段。傾斜がとても急で、スロープのない階段。お話をしてくれた佐藤美香さんは「優しくないと仰った。私も同じことを感じた。誰のための階段なのだろうと思った。税金を使い、作っているのに。

ただそれがあればいいわけじゃない。いろんな人のことを考える必要があるんだと改めて学んだ。



震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 3年 佐藤姫月

私は今回震災学習スタディツアーに参加し、東日本大震災のときに私自身が受けた被害とは比べものにならないほど大きな被害だったと学びました。今回訪れた、宮城県や福島県では、地震により津波や火災などの被害も加わり、多くの犠牲者やその家族が約14年経つ今でも家族の捜索をしていたり、語り部としての活動を行ったりしていると知りました。私が今回の震災学習スタディツアーで最も印象に残っていることと、教師になった際に私ができることの2つのことについてまとめます。



私は2日目に訪れた石巻市で語り部・佐藤美香さんの講話で、「報・連・相」の重要性と子どもを預かる幼稚園や学校の対応が緊急時、いかに大切かを学びました。お金をもらって人の命を預かっていた幼稚園の管理下で5人の子どもが命を落とすことになってしまったことについて、とても衝撃的なお話をしていただき、私自身が教師になった際に照らし合わせながら考えるととても貴重な時間となりました。高い場所に位置する幼稚園と、海の近くに暮らしている人では地震や津波に対する意識に差があったのかもしれませんが、自分の身を守った上で、子どもの命も守る必要がある教師になるために、まずは私自身の防災に関する知識を高めていきたいと思います。



私は今回の震災学習スタディツアーから正しい判断をするために常に自ら新しい知識を得ることのできる教師になりたいと強く思いました。生まれ育った場所ではないところで仕事をするのがほとんどだと思うので、その地形、町の歴史や特徴を理解しておくことが大切だと学びました。

語り部の方々にお話しいただいたことや震災遺構から学んだことを教師になった際東日本大震災を経験していない子どもたちに自分の言葉で伝えていきたいと思います。また、学校現場での防災教育として児童と一緒に知識を深める活動に力を入れたり、実際に災害が起きた際児童一人ひとりが考え行動できるように指導したりしていきたいです。

【私の一枚】

これは宮、城県名取市閑上の日和山においてある「津波の記念碑」の写真です。この地域では長年「津波は来ない」と言われ継がれていたようですが、この記念碑には過去に津波の被害があったと記載されていました。このように、将来への警告や教訓が記されたものを手掛かりに、犠牲者を少しでも減らせるような行動をしたいと思いました。



震災学習スタディツアーに参加して

教育学部 こども教育学科 3年 城之内妃奈乃

昨年参加した際に大きな衝撃を受けたことから、この1年間、防災に関する学びを深めてきた。そして今回、もう一度大きな被害を受けた場所を訪れ、多くの人の話を聞き、将来教員になった時に語り継ぎたいと思い、2度目の参加を決意した。

1日目は、閑上地区で長沼さんのお話を伺った。「災害は終わらない。どんなに町がきれいになっても、心の傷は癒えない」という言葉が印象的だった。大きな災害によって失うものは多くあったとしても、命は失ってはいけないと強く感じた言葉だった。

2日目は、午前中に田村さんご夫妻のお話を伺い、午後は佐藤美香さんのお話を伺った。本来であれば救えたはずの命があったにも関わらず、企業や教育現場の管理下で失われた命があったことに苛立ちと喪失感を感じた。「同調圧力を感じさせない為に、同じ目線で接する事が大切。」という田村さんご夫妻の言葉が印象的で、私が将来教員になった際には、田村さんご夫妻から伺ったように、同じ目線で子どもたちと接し、いざと言う時に、1人でも多くの命を救える教員



になりたいと強く感じた。更に、震災後に作られた避難用の階段を佐藤さんは「思いやりが足りない」と指摘し、「防災には思いやりが必要だ」と教えてくださった。1人でも多くの命を救うためには様々な配慮が必要だと実感した。

3日目は福島にて原子力発電所の事故に関する学びを深めた。事故発生前までは、原子力が良いものとして扱われて居たにも関わらず、事故発生直後からはいじめのきっかけにもなってしまう程の風評被害と戦う人々がいることを知り、衝撃を受けた。

今回のツアーを通して、身を守るために必要な知識を取り入れるだけでなく、これまでに起きてしまったことを実際に見聞きする大切さを改めて感じた。また来年のツアーに向けて1年間、更に1人でも多くの命を救うために私が出来ることを考え、防災に関する知識を高めたいと思うきっかけとなった。

【私の一枚】

これは、2月13日に訪問した、浪江町立請戸小学校の水道蛇口の写真です。建物が全壊してしまい、嘘のような光景が広がる中、この蛇口も見たことの無い形に曲がってしまっていました。

蛇口は全て同じように曲がっていたのではなく、それぞれが違う傷の負い方をしていて、自然の力の恐ろしさを改めて実感しました。



震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 3年 田端温人

今回初めて震災学習スタディツアーに参加をして、今まで知らなかった、経験することのなかったことを体験することができました。福島県や宮城県でのツアーを終えて印象に残っていることを大きく分けて3つにまとめたいと思います。



1つ目は、語り部の長沼さんの言葉です。「災害は終わらない」。この言葉には考えさせられました。災害から14年経って、街も新しくなっている状態でした。ですが、また同じ街には戻らない、一人一人の心の中には災害に遭ってから治らない人だっているそのようなことから「災害は終わらない」と教えてくださったのかと思いました。いつまでも終わることのない災害を一人一人が考えていく必要があると感じました。

2つ目は、田村さんご夫妻のお話です。息子さんを亡くされた2人のお話はとても心に響くものがありました。息子さんが働いていた銀行では上司に意見を言える環境ではなく、誰も高台に避難しようと言えなかったのだと、お話をされていました。田村さんのお話から「命以上に大切な



仕事はない」とありました。これは誰でも大切にしなければいけないと感じました。命がなければ仕事もできない、大事な人にも会えない。絶対に命を大事にしたいと感じました。また自分の意見が言しやすいような職場環境を目指していきたいと思いました。

3つ目は、佐藤さんのお話です。自分達と同じ年代の娘さんを保育園の監視下の下で亡くされたと言うお話でとても悲しく、悔しいと感じました。お話を聞いて「命の保護」をしっかりと考えなくてはいけないと感じました。助かった命が助からないこれはあってはいけないことだと思います。命を預かっている以上保護者の方に帰すまでは責任を持たないといけないと思いました。これから教師になろうとしているので、児童の命を守るということをしっかりと考え、対策をし、行動できるようにしていきたいと思います。

【私の一枚】

福島に海外の子どもたちから届いた励ましのメッセージです。日本だけでなく、世界から心配され支援をされていたのだと感じることができました。世界からの励まして当時の人たちはとても力になったのだらうと思いました。人と人との繋がりを、国境を超えて感じられることは素晴らしいことで、これからも支え合っていかなければいけないと思いました。



震災学習スタディツアーに参加して

教育学部こども教育学科 3年 林香菜子

今回のスタディツアーに参加し、東日本大震災とは今年で約14年という月日が経ち、「あの日」と表現され心に残っているほどの凄まじい出来事だったと強く感じた。今後のために震災の教訓とは何か考えるべきだと思ったので、述べていきたい。

田村さんご夫妻と佐藤美香さんのお話から、「人命最優先」で行動することや命の尊さを考えることができた。自分の命は自分で守っていかなければならないということを教訓に心掛けておくことが最も重要である。今後助けられるはずだった命を失ってしまうことがないように、事前の避難訓練や地域の特性を考慮したマニュアル作成などを徹底することが大切だと感じた。

また、教育現場においては子供の命を預かっている立場として、絶対に子供を後回しにはしてはいけない。自分の命と子供たちの命、両方を守るように周りの人々との連携を強化していく必要があると思った。

長沼さんのお話から、「地域の歴史を知ること」と「避難所の生活について考えること」二つの大切



さを学ぶことができた。一つ目について、私は佐倉市に住んでおり、近くには印旛沼と手繰川という川がある。この地形から洪水などの災害が起こると考えることができ、実際に2019年9月の台風15号において被害が出ている。このように居住地や勤務先などの地形や過去の災害を調べておくことで、被害を減らすことができると考えられる。二つ目について、私はお話を聞くまで避難所の生活がどのようなもの

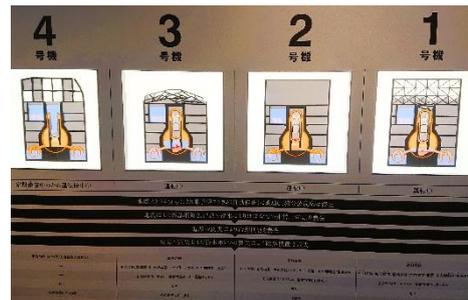
なのか全く知らなかった。周りにあるものでストレスを軽減するため、これまでの避難所の課題点などから考え、実施することが大事だとわかった。

以上のように私なりに学んだことから教訓を考えてみたが、他にも教訓として残すべきことがたくさんあると思うので、これからのためにいろいろな人と考え続けていきたいと思う。また、見て聞いたことを今度は自分が発信していきたいと強く思った。



【私の一枚】

2月13日に訪問した、東日本大震災・原子力災害伝承館で撮影したものです。私は原子力について、爆発した発電所の様子や被害の範囲しか知らなかったので、なぜ爆発したのか原理をこの写真や伝承館の映像で学ぶことができた。科学の力は繁栄をもたらすが、人命を脅かす脅威があることを忘れてはいけないと思いました。



震災学習スタディツアーに参加して

国際学部国際学科 3年 星和歌子

昨年、電車の中で小学生2人が「社会のテストできた？ 2011年の大震災って東日本だけ、西日本だけ？」っていう会話をしているのを聞いた。「あ、この子たちにとっては、長い長い歴史上の出来事の一つに過ぎないのだな」と驚いた。私は昨年初めて震災学習スタディツアーに参加した。そこで現地の方々、学部学年の壁を超えた敬愛学生、職員の方々などたくさんの方と出会い、自分の目で色々な景色を見た。「絶対に忘れてなるものか」と自分の目に焼き付けたつもりではあるが、時が経てば記憶は薄れていってしまう。今年度も参加し、新たな学びを得たいと思ったこと、どんな言葉で、どんな風に伝えるのが正解なのかと思ったことがきっかけで震災学習スタディツアーへの参加を決めた。



2日目には田村さんご夫妻のお話を伺って、美香さんと一緒に幼稚園バスが通った道を歩いた。実際に訪れ、話を伺う中で込み上げてくるものがあった。「これは救えた命だろう」と。当時の自分よりも年下の子たちが、今の自分と年齢の近い若い人たちが、怖い思い、寒い思いをしたというのが悔しくて仕方なかった。



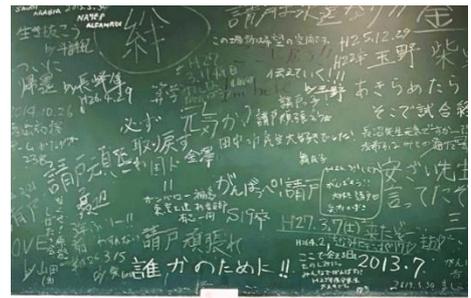
私は今大学3年でこれから就職活動に本腰を入れる時期である。企業防災について意識し、企業研究の項目の一つとして理解を深めていけたらと思った。

数えきれないくらいの方からバトンを渡していただいた。あの日どんな怖い思いをしたのか私には想像することしかできない。とても悔しい。大きなお金を寄付することは難しいし、学生の私にできることは正直に言うと多くないだろう。しかし、私だからできることもある。私は旅行が好きで食べることが大好きである。石巻産の牡蠣、仙台名物のせり鍋を食べて支援、することもできる。自分にできることを模索しながら生活していきたいと強く思った。昨年も同じ感想を抱いたと思うが、宮城県は、とても寒くて、とても人があたたかいところだった。

藤森さんとの出会い。宮城県で出逢った方々との出会い。このご縁に感謝し、また必ず訪れようと思った。私にできる支縁をこれからもしていきたいと思う。

【私の一枚】

震災学習スタディツアー3日目、震災遺構である浪江町立請戸小学校で撮影した1枚です。お顔もわからないし、お話したことも、もちろん会ったこともない方たちですが、負けなぞという熱い、熱い気持ちが痛いほど伝わってきて、黒板にある音もないメッセージを読んで、部屋で涙が溢れてきたのを覚えています。



当時を語り継ぎ、知識と備えで命を守ろう

教育学部こども教育学科 3年 村山真菜

東日本大震災から14年がたった今、被災地がどのような歩みを進めたのか、震災当時どのような状況だったのかを、改めて知る必要があるだろう。

「『いつもとは違う』、そう感じたときにはもう津波が来ていて遅かった」そう語る長沼さんは、大きな地震が来て一度は避難所へと避難したものの、家が心配で戻ってしまい、その後津波で家ごと流されてしまったという。お話の中で、避難所生活での体験談を伺った。お風呂や手洗い場を好きなタイミングで使えないことや、衛生管理の悪さ、避難所という公の場で「常に誰かに見られている」ということが少しずつストレスに感じてきて、人々は攻撃的な態度に変わってしまうそうだ。避難所生活は苦労もあったが、家族を亡くした方や住む家もなく元の生活には戻れない不安を抱えた方も多くいる中で、生きていられるだけで恵まれた自分たちが、避難所での生活が苦しいという声を上げられず、避難所生活の実際はなかなか周囲の人へ語り継がれることはなかったという。



私はお話を伺うまで、支援物資として必要なものは毛布や食べ物、水だろうと考えていたが、実際に不足していたものは、水や歯ブラシ、ダンボールだったそうだ。特にダンボールは、家庭ごとに仕切りのための壁に使えたり、ベッドを作ることに役立てられたりと、重要な物資だったという。一番に大切なのは「人の命」だということ。守られるという感覚ではなく「自分の命は自分で守る」それが一番大切なことだと、語り部の方々は強くおっしゃっていた。そこから、常にアンテナも高く持っているべきだということも学んだ。

地震が来たら、津波が来たら自分はどこへ逃げるのか、今いる場所から近い避難所や高台はどこにあるか今すぐに確認しておこう。

また、自然災害はいつ起こるかわからないし、時の流れとともに当時を忘れてしまうものだからこそ、伝承することや備えることの大切さを再認識すべきだと強く感じた3日間だった。

【私の一枚】

「娘が生きていたら今何をしていたのかな、きっと皆さんと同じように大学で学んでいたのかな」そう語る愛梨さんのお母さん。当時6歳だった娘の愛梨さんは東日本大震災で亡くなった。あの時幼稚園バスがいつも通りの時間で帰ってきていたら、地震発生後に帰さずに園で待機してくれていたら助かったはずの命に、お話を聞いている私自身も悔しく、悲しい気持ちになった。年を重ねられることに感謝をして生きたいと強く思う。



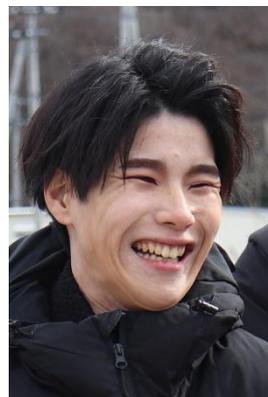
「非」被災者が震災を伝承する

教育学部こども教育学科 4年 藤森朋幸

今年で3回目となる宮城県での震災学習。3回目でも新たな学びが尽きなかった。以下、今回のスタディツアーで感じたことを2点述べる。

第一に、「避難所の大変さ」である。

1日目は長沼俊幸さんからお話を伺った。避難所生活は我慢が多い、毎日同じ菓子パンやおにぎりしかない、風呂も入れないし髪も洗えない、まわりの目が気になって眠れない、といった避難所での実体験を語ってくださった。そのお話の中でまわりの目を気にならないようにするために、ダンボールで仕切りをつくったことが安心に繋がったと教えてくださった。「この知識をもっている人が避難所で実践すれば、教訓が生きたことになる。」と長沼さんは仰っていた。有事の際には、このような知識を活用していきたい。



第二に「託されたバトン」である。

2日目は田村さんご夫妻、佐藤美香さんからお話を伺った。双方とも大人の管理下でご子息ご息女を亡くしてしまった。上司に意見が言いやすい職場だったら、子どもたちも一緒に幼稚園に戻っていたら、助かっていた命があったと聞くと、本当に胸が痛んだ。



大人の判断で人の生死を分けることがあるという現実を実感した。そして3人は口を揃えてお話しの最後に、「このバトンを皆さんに託す」と仰ってくださった。同じ悲劇を繰り返さないため、今度は私たちが次代へ伝えていく使命感を強く実感した。

これから私たちは、「非」被災者の伝承者になる。私はこの春から多くの子どもたちに東日本大震災を伝えていく小学校教員という立場になる。子どもたちに震災を伝承することで、未曾有の災害へ備える力を涵養していきたい。

【私の一枚】

門脇小学校の昇降口で、佐藤美香さんのお話を伺っている様子の写真である。ここでの教職員の判断が、本来助かるはずだった5名の園児の生死を分けた。一緒に高台にある日和幼稚園へ戻っていれば助かった、しかしその判断ができなほど教職員をパニックに陥らせていた状況だったのだと実感した。



伝えるバトンを受け取った今

国際学部国際学科 4年 山田瑞基

今回2回目の参加となりましたが、それでも多くの新たな知見を得ることができました。このような貴重な場を設けてくださった藤森さん、また今回のツアーで当時の様子をお話していただいた皆様に、この場を借りて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

一日目は、閑上地区のお話を聞かせていただきました。初参加の際にも「ここには津波がこない」という思い込みが多くの人々にあったというお話が印象に残っていましたが、今回の閑上の記憶でのお話で、さらに印象に残った点がありました。それは「私たちは津波の怖さを知らなかった」というお話です。震災で実際の津波の威力を記憶していた私には、「津波は怖いものだ」という考えが刷り込まれていましたが、それ以前は、そもそも津波というものについて知らなかったということをお話したのです。当時、大津波警報が発令されていても避難しなかった人が多かったのは、単に「津波がこない」という思い込みだけでなく、津波そのものを知らなかったということに驚くと同時に、知ること、伝えることが防災の面でどれだけ重要なことか改めて認識しました。3日目に



訪れた原子力災害伝承館での語り部の方のお話でも、大津波警報が出ていても避難せず、近所の方と川沿いで話していたと伺いました。

女川で田村さんご夫妻のお話を伺い、最終的に自分の身を守るのは自分でありつつも、同調圧力を生まない企業の職場環境を訴えることで、企業全体の従業員の防災につながるのではないかと考えています。私は中小企業に就職しますが、人数の少ない企業のため、職場環境の訴えでは大きな役割を担えらるかと考えています。「伝えるバトン」を受け取った以上、このお話を就職先にも伝えていくのが、今の私の役割だと考えています。

【私の一枚】

震災遺構・浪江町立請戸小学校（福島県）での一枚です。展示資料の中に「遠瀬だから、ここには津波は来ない」と言われていたというものがありました。この高さの津波が押し寄せた景色を見た当時の方々は、とても驚愕したと思います。言い伝えに惑わされず、自分で判断することが大切だと、より深く感じました。



関心をもつ続けることの大事さ

(引率者)教育学部 准教授 佐藤孔美

「バトンはみなさんに渡しました。バトンをどう使うかは皆さん次第。私たちは考えるきっかけを与えただけです」。佐藤美香さんが最後に私たちに投げかけた言葉です。このお言葉は、今回伺った3人の方々のお話を決して聞くだけで終わらせず、きちんと語り繋いでいかななくてはならないことを、私たちの心に強烈に響かせました。

今回の被災地訪問は個人的に7回目の訪問でしたが、まだまだ知られざる事実がたくさんあることを痛感しました。今回、特に心に残った言葉は、「管理下における落命」ということです。女川でお話を伺った田村さんご夫妻、石巻でお話を伺った佐藤さん、いずれも助かるはずの命だったはずなのに、その当時の組織の適切ではない判断によってそれぞれのご子息が亡くなったことは、本当に無念しかなかったであろうと感じました。このような悲しい出来事が二度と起きないように、田村さんご夫妻も佐藤さんも辛い気持ちを抱えながら多くのことを伝えてくださいました。そして、組織が正しく判断したりいろいろな人の意見にきちんと耳を傾けたりすることの重要性を再認識させてくれました。私は今組織の中の一人として、何でも言い合える職場、おかしいと思ったことを口にできる職場、そんな風通しのよい職場作りの重要性を改めて考えることができました。



2011年3月11日のあの日から既に14年が経過しようとしています。しかし、何年経っても、実際に現地に赴き、直接お話を伺い、自分の目で見て確かめるという行為から学ぶことはまだまだあることを今回も実感しました。そして、まだなお復興途中である被災地に対して私たちが関心を持ち続け、それを発信していくことが、私たちにできる被災地に対する応援の1つであると感じています。

2011年3月11日のあの日から既に14年が経過しようとしています。しかし、何年経っても、実際に現地に赴き、直接お話を伺い、自分の目で見て確かめるという行為から学ぶことはまだまだあることを今回も実感しました。そして、まだなお復興途中である被災地に対して私たちが関心を持ち続け、それを発信していくことが、私たちにできる被災地に対する応援の1つであると感じています。

【私の一枚】

3日目に訪問した原子力災害伝承館で見たこの1枚の写真。原子力発電所ができたときに子供が書いた作文があった。「発電所を作ったお陰で人口がふえて、車も買えるような大金持ちも現れてきたのですごいです。」町を潤すはずだった原発が、50年後には人々の未来を奪ってしまったのである。私たちはその教訓をしっかり学ばなければいけない。



敬愛大学 震災学習スタディツアー2024 参加者

(参加学生)

| | | | |
|--------------|---------|--------|--------|
| 経済学部 | 1年 | 竹田 百花 | |
| | 2年 | 稲村 優希 | |
| 国際学部 国際学科 | 3年 | 星 和歌子 | |
| | 4年 | 山田 瑞基 | |
| 教育学部 こども教育学科 | 1年 | 浦山 優芽 | |
| | | 落合 凛 | |
| | 2年 | 清水 広司 | |
| | | 小滝 愛斗 | |
| | | 川瀬 葵晴 | |
| | | 君島 義啓 | |
| | | 黒田 つかさ | |
| | | 近藤 愛美 | |
| | | 櫻井 友駿 | |
| | | 佐藤 晴輝 | |
| | | 鈴木 唯人 | |
| | | 高取 賢太郎 | |
| | | 堀野 果瑚 | |
| | | 宮手 花林 | |
| | | 3年 | 伊藤 瑞希 |
| | | | 小野 美智子 |
| 4年 | 加藤 凜花 | | |
| | 佐藤 姫月 | | |
| | 城之内 妃奈乃 | | |
| | 田端 温人 | | |
| | | 林 香菜子 | |
| | | 村山 真菜 | |
| | | 藤森 朋幸 | |

(引率教職員)

| | |
|----------------|-------|
| 地域連携センター センター長 | 藤森 孝幸 |
| 教育学部 准教授 | 佐藤 孔美 |

敬愛大学 震災学習スタディツアー2024 活動報告書

令和7年3月31日 発行

発行人 藤森孝幸

発行所 敬愛大学地域連携センター

〒263-8588 千葉県千葉市稲毛区穴川1-5-21

メール crc@u-keiai.ac.jp

電話 043-251-6364(直) ファックス 043-284-2261(直)



今年度参加した学生たち。宮城県女川町の伝承施設「女川いのちの広場」の前で、田村孝行さん・弘美さんご夫妻と共に映る学生たちの姿です。女川町には、宮城県内最大の14.8mの津波が押し寄せました。その津波により、ご子息健太さんも25歳で命を落とされました。健太さんが大好きだったガッツポーズで全員が映っています。本学からこれまで参加したのべ400名にも及ぶ学生たちと共に、これからも語り継いでいきましょう。

UD FONT 本冊子には、見やすいユニバーサルデザインフォントを採用しています。